

イタリア、そしてミラノ

倉 田 稔

もくじ

はじめに

イタリア中世の成り立ち

補い

ミラノの歴史

ミラノで

補遺

はじめに

ルネサンスの建築や美術の実物をほんの少しでも見ておこうと、ミラノ、ヴェネチア、フィレンツェ、ローマにだけ、出かけた。ミラノについては本稿で述べる。ヴェネチアとフィレンツェについては、前号の『言語センター広報』（23号、2015年1月）で、ローマについては、「ローマ素通り ヴァチカンで」（『日伊協会支部広報』札幌、vol. 53, 2015年5月号）で、書いた、本稿の初めの部分で、中世イタリアの成り立ちについて少し記し、その後、ミラノ体験を書く。

イタリア中世の成り立ち

イタリアは、古代ローマ帝国の支柱であった。中世のヨーロッパはゲルマン民族の国々になる。ゲルマン民族は初め北欧や北ドイツに住んでいた。ゲルマン人のテウトニ族とキンペリ族が紀元前110年にドイツに侵入し、南ガリアまで来た。それがローマ帝国のマリウスに討たれた、という経緯もある。その後、ゲルマン人は南下し、大陸先住民ケルト人を圧迫し、同化させた。紀元前1世紀には、ローマ帝国と接するようになった。

ゲルマン民族は、農業、牧畜、狩猟の民だった。紀元前1世紀に飢饉に陥った。ゴート族はバルト海を船で渡ったと言う伝説があるが、実際は東北ドイツに住んでいた。かれらは武装難民になった。まずグダニスクへ行った。ゴート族はローマ帝国の強敵の1つになった。332年にコンスタンチヌス大帝(272-337)は西ゴート族と協定を結んだ事もある。ゴート族はその後、グダニスクを出て、ドニエプル川に達し、キエフに來た。その南ロシアに360年頃に王国を作った。ゴートはドニエプル川をはさんで2つの民族に分かれていた、東ゴートと西ゴートである。ここにフン族がやってきた。

ゲルマン民族は375年から民族大移動を始めた。その理由は、人口増とそれに見合う耕地の不足であり、また東方からフン族が侵略してきたからである。フン族は、匈奴の一派らしい。北アジアの遊牧騎馬民族で、中央アジアのステップ地帯の出、らしい。フン族は実際にはまず、東ローマ帝国領内を荒らし回った。東ゴート族、西ゴート族を圧迫し、そこでゲルマン民族大移動を誘発した。

375年前後に大事件にあったわけだ。フン族がアラニ族を従えて、東ゴートに攻め込んだ。ゴートの当時の大王はエルマナリクで、抵抗したが、自殺した。彼は、後に出るテオドリックの先祖だった。東ゴートはフン族の遊撃戦に負けた。東ゴートは独立国家ではなくなった。フン王はバラルヘムで、エルマナリクの孫を妻にした。東ゴートはフン族に組み込まれた。東ゴートは滅亡直後385年に、東ローマ帝国領に移住させてくれと懇願したが、殲滅された。404年にドナウからイタリアに侵入し、しかしローマ帝国のスティリコ将軍に敗れる。

西ゴートは東ローマ帝国に搾取された。

フン族が東ゴート民族を征服したので、375年以降、これを恐れた西ゴート族が南下した。西ゴートは378年、アドリアノポリスで、ローマ軍と戦う。勝つが、妥協してしまった。

フン族は5世紀中頃、つまり大民族移動が始まって後、アッティラの時代に統一帝国を造った。フン族の大王アッティラは、兄ブレダと共に王位についたが、兄が病死し、あるいは兄を殺し、434-453年まで王位にあった。パンノニア（今のハンガリー）に王国を作り、451年に西ローマ帝国のガリアに侵入し、北イタリア、またミラノにも侵入した。しかし同451年、カタラウヌムの戦いで負け、パンノニアに戻った。だがアッティラは、東西ローマ相手に戦い、戦利品と貢ぎをえた。アッティラはフン族の定住を目指した。

西ローマ皇帝ヴァレンティアヌス3世の姉にホノリアがいた。宮廷には宦官だけだった。宦官になるには手術をして命を落とす方が多かった。かれらはしかし出世することができた。彼女はその状況の中で、もちろん宦官ではない侍従エウゲニウスの子を産んだ。母は呆れ驚き、ピザンチンに追放した。このホノリアがアッティラの存在に恋した。アッティラは、ホノリアが不遇であるという理由をつくって、西ローマ帝国を攻めた。アエティウスが、西ローマと西ゴートの連合軍で迎え撃った。シャロン・シュール・マルヌの戦いであった。西ゴート王が戦場で事故死した。451年夏、西ゴートは撤退し、フンも撤退し、ハンガリーへ戻った。その後、フン族は452年にイタリア遠征をし、北イタリアを占領した。教会がアッティラを説得し、手を引かせた。

これをきっかけにして、イタリア北部のヴェネート人はヴェネチアの島々に逃げ込むのだった。

アッチラは東ローマを攻撃すると言って、脅迫した、だが、この大王は453年に病死した。結婚式の直後だった。フン族は多妻制だった。東ローマのプリスクスが使節としてきたので、アッティラについて少し記録を残した。アッチラの本名は伝わっていない。アッティラはおやじという意味である。

フン王国は後に、ゲピート族の王アルタリックによって崩壊する。

ゲルマン民族の移動によって、ローマ帝国が倒れたのだが、イタリアについて言えば、初めに、ゲルマン民族の1つ、東ゴート民族がイタリアに侵入した。東ゴート族⁽⁴⁾は、最初にフン族の侵入によって大打撃を受けた民族で、英雄テオドリック（454-526）により、フン族の支配を抜け出した。テオドリックは、東ゴート王国創始者で、東ゴート族の王子の子であった。東ローマ帝国の人質としてコンスタンチノポリスの宮廷で過ごした。父が470年に王位に就くと、帰国し、叔父の領土を継いだ。父の死後、王位についた。486年に東ローマ帝国の軍事長官に任命された。

一方、ゲルマン人オドアケルは、ほぼ430年の生まれで、スキル族出身であり、その首長の次

男であった。かれは西ローマ皇帝の親衛隊に入った。そして西ローマ帝国で貴族（パトリキ）になった。このころからゲルマン人が皇帝を決めるようになった。

アッチラの秘書だったオレステスが西ローマ帝国に入り、出世し、謀反し、475年、息子ロムルス皇帝にした。

5世紀に西ゴートとヴァンダル族がローマを略奪した。そこで西ローマ帝国は首都がミラノへ移り、404年にラヴェンナへ移った。

オドアケルは476年にイタリア在住ゲルマン人の王に選ばれ、オレステスを襲い、ロムルスに退位させた。こうして476年に帝国を倒した。彼は王国をつくったが、東ローマ帝国の内政に干渉したので、東ローマ帝国の皇帝ゼノンは、テオドリックにイタリア遠征をさせた。テオドリックは489年、リュブリアーナでオドアケル軍を破り、ヴェローナで再びオドアケルを破り、ミラノを占領した。オドアケルは、首都になっていたラヴェンナに退き、492年テオドリックはラヴェンナを封鎖した。ラヴェンナの司教が両者を仲介し、テオドリックは、ラヴェンナに入城した。493年、彼はオドアケルを食事に誘い、だまし討ちにした。493年、テオドリックはイタリア王を名乗った。ただし東の皇帝はやっと497年に認めたのだが。テオドリックはアリウス派であった。そしてラヴェンナを首都とした。こうして東ゴート民族は、イタリアに493から555年まで国を造った。東ゴート国は東ローマ帝国の承認を受け、イタリアを領土とした。テオドリックには跡継ぎの男子がいなかったので、娘アマラスウィンタに婿・エウタリックを迎えたが、彼は急死した。そこで孫のアタリックを世継ぎと決め、その母アマラスウィンタが摂政になった。アタリックも病死し、アマラスウィンタが女王になった。ここでテオダハトがクーデタを起こし、535年にアマラスウィンタも重臣たちに殺された。これで東ローマ帝国は東ゴート攻撃の口実にした。まずダルマチアを落とし、シチリアを降伏させ、最後にテオダハトは暗殺される。ウィティギス将軍が東ゴートで王に選ばれた。東ローマはこの王位交代を承認したが、戦いは行われ、540年にラヴェンナを占領した。新王トティラが出たが敗戦死し、その後、テヤが出たが、敗北する。こうして、東ローマ帝国またの名ビザンツ帝国に滅ばされた。かのユスティニアヌス皇帝（483-565）によってである。

東ローマ帝国ではユスティニアヌスが皇帝になっていたが、甥のユスティニアヌスが彼のもとで出世した。皇帝が527年に没したので、ユスティニアヌスが皇帝になった、彼は、女優・売春婦テオドラ（497年生まれ）と結婚した。⁽²⁾ニケの乱が起きて、皇帝は逃亡しようとしたが、テオドラが、反対し、いさめた。ユスティニアヌスは大遠征をし、東ローマ帝国を広大な国に仕上げた。その際、ヴァンダル族（北アフリカ）も攻め落とす。

その後、ゲルマン民族の一つであるランゴバルト民族が488年ころ、ドナウの北方に現れた。ユスティニアヌス皇帝（東）は彼らにパannoniaを与えた。彼らはユスティニアヌス大帝に協力し、東ゴート族を滅ぼす。しかし大帝の死後、568年にランゴバルトのアルポイン王は北イタリアに侵入した。ミラノを占領し王国をたてた。そして、東ローマ帝国を追い出し、568から774年に国を造った。別名ロンバルド王国という。これにより、イタリアの古代が終わり、中世になった、とも言われる。ちなみに、これで、ヴェネチアの島々に逃れて住んだヴェネチア人が海の上にヴェネチア島を作って住むようになる。ランゴバルト国は、後にフランク王国のカール大帝（742-814）に滅ぼされる。ロンバルディアと言う地名は、このランゴバルトの名から来た。

(1)松谷健二『東ゴート興亡史』白水社。

(2)橋川・村田「プロコピオス『秘史』—— 翻訳と注(1)」(『早稲田高等研究所』5号)

補い

東ゴート以外に、民族移動をしたゲルマン民族は次の通りである。

西ゴート族は、民族移動のきっかけを作った民族だが、移動を375年に開始し、378年にアドリアノーブルの戦いでローマ軍に勝ち、ダキアを経て、ローマ領内に居住した。西ゴート族は5世紀初、イタリア半島に侵入したが、ガリアに向かった。415年に南フランス、トゥールーズで建国した。711年まで王国が続いた。507年にクローヴィスのフランク王国に負け、イベリア半島に移った。西ローマ帝国が476年に滅びると、エウリック王は、6世紀に、フランス中部からイベリア半島南部・中部まで領土を広げた。621年にイベリア半島全域を支配した。711年にウマイヤ朝（イスラーム帝国）に滅ぼされるまで、続いた。

ヴァンダル族は、ゲルマン民族とされていたが、スラブ系またはイリュリア系と考えられるようになった。ガイリックが王になり、429年ジブラルタルを渡り、カルタゴに向かい、439年に占領し、ヴァンダル王国を北アフリカに、429-634年まで作った。いわば北アフリカを強奪した。その王ゲイゼリックは445年にローマを2週間略奪した。シチリア、サルデニア、コルシカ、バレアス諸島を征服した。455年にローマを占領したことがある。ビザンツ帝国のユスティニアヌスに534年に滅ぼされるまで続いた。

ブルグント族は、スカンジナビアに住んでいた。ホーンホルム島にいた。民族移動で、ライン谷に定住した。その後、サヴォイ地方に移った。ガリアを中心に、443-534年まで国を作った。493年、クローヴィスは、ブルグント王女クロティルダと結婚し、彼女はクローヴィスをカトリックに改宗させた。534年、フランク王国に滅ぼされた。

アングロ・サクソン民族は、ブリタニア（現在のイングランド）に449-829年まで国を造り、初代イングランド王エグバート（在位 825-834）の登場まで続いた。

フランク人は西ゲルマンの一部族であった。これが次に王国を作った。

フランク王国は、ガリア北部、今のフランスを中心に481から848年まで続いた王国である。クローヴィス（在位 481-511）がメロヴィンガー王朝を開き、496年に彼はアリウス派からアタナシウス派に改宗した。いわゆるカトリックにである。王国は徐々に拡大し、しかしその後分裂して、王朝は751年まで続いた。メロヴィンガー王朝時代に、各地方の宮宰が力をもつようになり、8世紀にカロリング家が宮宰を世襲するようになった。

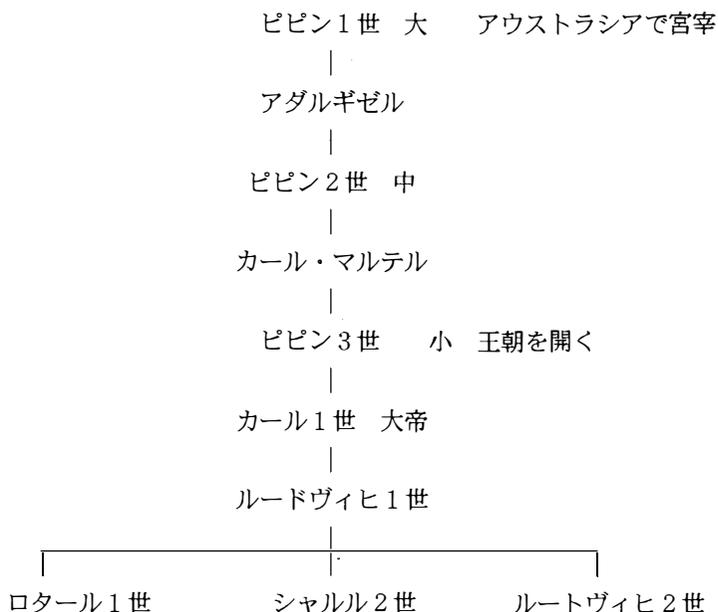
732年にイベリア半島からウマイヤ朝の軍がフランク国に迫った。宮宰カール・マルテル（686-741）がこれを撃退する。カール・マルテルの子、小ピピン（714-768、ピピン3世）が、751年にカロリング朝を創立した。ローマ教会とフランク王国が接近する。

756年、小ピピンがランゴバルト族を攻撃し、北イタリアを獲得した。その一部を教会に寄進した。教会領はその後拡大して、中部イタリアをなし、これでイタリアは将来に亘り三つの部分に分けられてしまうのだった。

小ピピンの死後、その子カール（742-814）が王となり、ザクセン人、ランゴバルト人、スラブ人、アヴァール人を征服し、大国になる。彼はローマ教皇から戴冠され、大帝と呼ばれる。没後、843年のヴェルダン条約で、このヨーロッパ地方は三分割され、870年の再分割で、ドイツ、フランス、イタリアの原型ができる。

イタリア、そしてミラノ

カロリング朝の系図はこうである。



イタリアでは、875年にカロリング家が断絶してから、幾つかの都市国家が自立し始める、同時に他民族が侵入してくる。

参考。エドワード・ギボン『ローマ帝国衰亡史』ちくま学術文庫。
オーギュスタン・ティエリ『メロヴィング王朝史話』上・下、岩波文庫

ミラノの歴史

ミラノは、ローマ帝国の時代に、一時首都になった。コンスタンティヌス（後の大帝、当時、西方正帝）とリキニウス（当時、東方正帝）が連名で出した、キリスト教を認めるミラノ勅令（313年）で有名である。

北イタリアとミラノは、フランク王国に属した。ここが、神聖ローマ帝国になったので、16世紀から神聖ローマ帝国に属した。ついでスペイン・ハプスブルクの統治下に入った。18世紀に、オーストリア・ハプスブルク家に帰属した。

ナポレオンが1796年にオーストリアをミラノから追い出したが、ナポレオンの没落後、1815年に再びロンバルディア・ヴェネチア王国としてオーストリア・ハプスブルク家に戻され、支配された。オーストリアではミラノをマイラントという。

19世紀ヨーロッパ大陸の最大事件・1848年の革命は、ミラノの煙草工場（ハプスブルク家経営）の一揆から始まった。革命が終わってから後であるが、1859年にソルフェリーノの戦いで、ミラ

ノはオーストリア・ハプスブルクから離脱した。ミラノはイタリア統一運動の中心地にもなった。

このイタリア独立運動は、サルデーニャ王国（イタリア北西部）を中心とし、ロンバルディ（旧ミラノ公国、イタリア北東部）がサルデーニャ王国に併合された。この時ミラノはイタリア王国の中に入った。一方、独立派のジュゼッペ・ガリバルディが、シチリア王国に上陸し、両シチリア王国（シチリア島と南イタリア）を征服した。こうして1861年に、イタリア王国が建国され、1866年にヴェネチアが、70年にローマ教皇領などが併合した。

ミラノで

2012年9月にミラノへ行った。ミラノは北イタリアにあり、ロンバルディア州都で、ミラノ県の県都でもある。市の人口は130万人で、イタリアでは二位である。近郊をいれると526万人で、イタリア最大の都市圏である。

9月8日、ミラノ・マルペンサ空港に着いた。送迎があり、イタリア人が大きなベンツで迎えに来た。ハイウエーから市内に入った。途中、新興住宅地があり、そこに600万人が住む、と彼は言う。なくなった市電の道もある。ただし市電は市内にはある。綺麗な大きな教会があり、それは商業用＝結婚式用だった。ホテルに着いた。イタリアではあまり缶コーヒーがないみたいである。だが部屋にはインスタント・コーヒーがあった。これは、これ以後行くイタリアの他のホテルでは、なかった。疲れたので、外へ行かず、そのまま寝た。それにミラノは、今回は通過点にすぎない。現在、イタリアではホテル税がとられる。1人1泊で、星（ホテルの格）の数に掛ける1ユーロである。ただし、これはおおよその基準である。

ミラノは周囲に有名な湖が数かずあって、それらを訪れるのが観光の他の目的らしい。

ミラノは近代的な町で、人は流行にも気を配るといふ。2015年に万博があった。

9日 我々のホテルはミラノ中央駅から徒歩5分のところにある。ホテルが近代的だから、つまらない。予約していたツアーの明日の集合場所を見ようとして、地下鉄「ツェントラル・スタチオーネ」駅（つまり中央駅）から出かけることにした。地下鉄の券は改札近くの雑誌売り場、つまりキオスクで買うのだった。珍しいことだ。そこでは、たばこも買える。地下鉄で4つ目の駅でおり、道に迷いながら、集合地を見る。途中、地図を売る四、五人の若い娘たちの押し売りに囲まれた。ローマ人のようだ。中学か高校生くらいの年齢で、制服を着ている。私は地図を持っているから必要は無い。ワイフに群からひっぱり出してもらって、難を逃れた。

さて散歩することにした。ジェラード（＝アイス）を食べて、トイレに入ったら、上敷きと、ふたがないのだった。ダンテ通りを教わって、歩く。ここは歩行者天国である。そして一番有名な通りのようだ。

ドゥオモ（大聖堂）にゆく。宏大である。とにかくミラノでは建築物としてはドゥオモが一番有名である。早速、中を見る。脚丸出しの女性が入場を断られていた。何しろ神聖な場所だからである。

ドゥオモ（大聖堂）内部を見終わって、寺院内で、絵はがきやドゥオモ模型を買った。ドゥオモは、1368年の着工で、ミラノ公国の領主ジャン・ガレアツォ・ヴィスコンティの命令で、聖母マリアに捧げるために作られた。ナポレオン（一世）により1813年に完成した。だから500年かかったわけである。ミラノはナポレオンに占領された時代がある。柱や壁に3500の彫刻がある。屋根から135本の尖塔がのび、その先端に2245人の聖人たちの彫刻がついている。一番高い

尖塔の上に愛の女神マリア像があり、これは1774年に設置された。ドゥオモの高さは108.5mだ。地下聖堂があるが、有料だ。正面五枚の大扉はゴシック様式のレリーフのブロンズ製である。ところで、後日分かったのだが、正面よりも裏面の方が大きくて立派なように思われた。そちらには行かなかったのが、残念なことをした。

イタリアではトイレの上敷きと蓋がないところが多い。もちろんウオッシュレットは日本だけにあるものだから、イタリアにもない。女性のおしりの大きい人が多い。専門レストランにメニューでパスタの大項目がない。ミラノは流行の先端を行く町だとのことである。

旅行社の案内の紙を見て、あるレストランを探すが、なかなか見つからないで、やっと探しあてた。何人もの人に聞いたのだが、傍に近づきながら、分からなかったのである。途中で日本人の「もの見の塔」の人に会った。こんな所まで来るのか、お金があるのだな、と感心する。

やっと見つけたこの専門店でミラノ風カツレットを注文するが、きわめて大きい。骨付きの仔牛であった。ウィナー・シュニツェルの元になったというものなので、是非食べようと思っていた。だが、ウィナー・シュニツェルの方が食べやすい。ワイフは、ミラノ風リゾットで、卵とチーズが入り、おいしい。この2つは最も有名なミラノ名物であった。ウェイターが「シェア(分けて食べる)」と言ってくれた。水を瓶で1本注文する。イタリアのレストランでは客の扱いが良い。

そのまま同じ道を戻り、メトロ線で帰った。車中で乞食に会った。切符を買ってまで乞食をしているのか、と思う。誰もお金を出さなかった。

ミラノ鉄道駅を見に行ったら。明日ここを出発するのだし、最近ヨーロッパの鉄道駅に行っていないので、不安だったのと、見物も兼ねて、である。駅に乞食がいた。おもちゃの類いを売る大道商人も駅前に居る。駅は大きな立派な物であった。流石大都会である。

9月10日 レオナルド・ダ・ヴィンチ「最後の晩餐」を含む半日観光のバス・グループ見学に参加する。日本で予約しておいたものだ。レオナルドの絵だけ見るために切符を取るのはいらないからである。インターネットでもとれるようだ。我々をガイドしてくれたのは、あらいさんという女性で、在伊20年だそうだ。イヤ・フォンをつけて日本語でガイドを受ける。他の外国人客らと同じバスで廻る。日本人は我々だけだった。

ツアーではまず、スカラ座とその博物館を見る。当時の衣装や有名歌手の写真など陳列されていた。テバルディや、マリア・カラスの写真もあった。そのうちの博物館の様なところは写真をとってはいけないようだ。

スカラ座は、マリア・テレジアがウィーンのよりも大きいのはつくるなと命令した、と言う。ここはハプスブルク領になったことがある。マリア・テレジア時代(18世紀)のウィーンのオペラ座は今はないが、多分それほど大きな物ではなかっただろう。それより立派でないものとなると、困ったことだろう。内部はしかし、大きくて立派なものである。もしかしたらその後改造されたのだろうか。現在のウィーン国立オペラよりは外観は、大きく立派ではない。スカラ座は今、世界最高である。ウィーン、ベルリン、ニューヨーク、パリと、有名なオペラ座がある。その中でも建物の大きさと外観はともかく、ミラノ・スカラ座は格が高い。なにしろオペラはイタリアが発祥地である。ピラを見ると、出し物はオペラではなかった。

スカラ座の前の広場に、レオナルド・ダ・ヴィンチ像がある。またそこに市役所もある。

そこから、屋根付き買い物名店街を歩いた。ガレリア・ヴィットリオ・エマヌエーレ2世というのだ。通路が十字型になっているアーケードである。鉄とガラスのドーム屋根で、これは世界

初だと言う。一八六七年に、イタリア統一を記念して作られた。ヴィットリア・エマヌエレ2世は、初代イタリア国王になった人である。ここには、いわれ因縁のある部分がある。アーケードの中の通路の交差点で、世界の四大陸を表すフレスコ画、そして床面のモザイクがあるのだ。

ツアーにはドゥオモが入っているが、ドゥオモは前日入ったので、入らないことにした。その間ガイドさんとお喋りをした。イタリア人は自己主張が強い、妙なところで強調する、とガイドが言う。

寺院の正面隣にハプスブルクの邸がある。

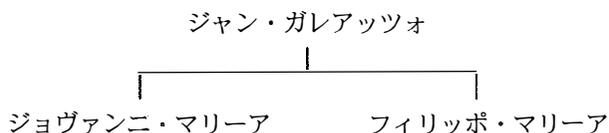
寺院サンタ・マリア・デッレ・グラチエ教会で、レオナルド・ダ・ヴィンチの絵「最後の晚餐」を15分間見る。それが制限時間なのだった。30人ごとに時間区分して見ることになっている。一種感動を覚える。たった15分だが、15分見続けていると、それだけだから満足はする。これは付属する修道院の食堂だった壁に書いた画である。そのため、ここに来ないと見られない。レオナルド・ダ・ヴィンチ（1452-1519）は、日本語に訳すと、ヴィンチ村出身のレオナルドということで、庶民だから姓はない。

レオナルド・ダ・ヴィンチは、フィレンツェで修行し、その後、ミラノへ移った。ミラノ公ルドヴィーコ・スフォルツアの依頼で、1495年から3年間でこの絵を完成した。その後人々が、食堂に通路を作ったとき、壊したので、キリストの脚の部分が消えてしまった。一二使徒とイエスが食事をしている絵である。隣に座る人は、説明文によればヨハネとされている。しかし近年、汚れを落としてきれいになった現在の絵を見ると、どうしても女性である。レオナルド・ダ・ヴィンチは、だからマグダラのマリアを描いたのだろう。（ダン・ブラウン『ダヴィンチ・コード』参照）ただしそれが史実であるかどうかは別である。彼女はおそらくキリストの妻である。

その後、スフォルツェスコ城を見学する。ここは砦である。ヴィスコンティ家が14世紀に建造し、スフォルツア家が再建した城塞である。外堀・内堀が片側に、堀が反対側にある。小さな博物館もある。遠くにナポレオンが作った凱旋門が見える。

ミラノは、一時、西ローマ帝国の首都になったことがある。中世に自治都市になり、1277年に貴族ヴィスコンティ家が、領主からミラノの統治権を奪った。同家は1447年まで続いた。1450年から軍人フランチェスコ・スフォルツアが権力を握った。その息子ルドヴィーコは学芸の保護をし、レオナルド・ダ・ヴィンチを迎えたのだった。

ヴィスコンティ家の系図はこうなる。



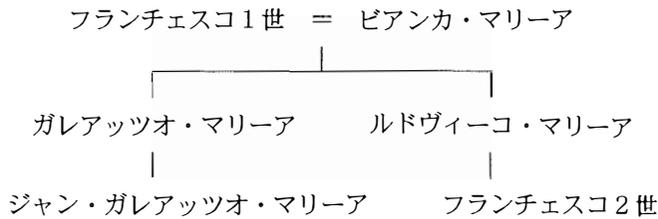
ヴィスコンティ家は、ミラノのシニョーレ（領主）の世襲化に成功した。1384年にジャン・ガレアッツォは、ロンバルディを統一した。1396年に皇帝から公位を得た。1404年に急死した。

その息子は、ジョヴァンニ・マリーアだが、暗殺される。そこで、その弟フィリッポ・マリーアが継いだ、彼には息子がいないので、娘の夫スフォルツアが公位を継いだ。1450年に権力を握っ

た。フランチェスコ1世である。その息子ガレアツツオがその後を継ぐ。だがフランチェスコの息子ルドヴィーゴが甥の摂政になり、彼はイル・モーロと言われる。ミラノ公国は形式上神聖ローマ帝国に属しているが実質は権力を持った。

1500年に、フランスに占領された。

スフォルツァ家の系図はこうなる。



ビアンカ・マリーアは、ヴィスコンティ家の1人娘である。だから養子がヴィスコンティ家を継いだことになる。レオナルド・ダ・ヴィンチを迎えたのは、ルドヴィーコ・マリーアである。

ガレアツツオ・マリーアの庶子がカテリーナ・スフォルツァで、ジャン・ガレアツツオの姉にあたる。イタリア第一の美女といわれ、剛毅の人だった。

1535年にスフォルツァ家は絶えた。

観光が終わって、教わった「カフェ・ミラノ」で昼食をする。テントの下の屋外で、である。ダンテ通りに張り出している。ワイフはピザをとった。またボーイが「シェアする？」と喋ってくれた。つまりお皿を余分に持ってきてくれるのだ。ミラノでは観光客に気を配るのかもしれない。私はワインだけだった。イタリアではワインは皆おいしかった。本屋で、とある本を注文したら、なかった。ミラノで1番大きい書店はRizzoliだと教わった。ただし行く暇はもうなかった。

街路上で空に浮く芸人がいた。若い女の子だ。グループでこういう仕掛けを作っているのだった。ワイフは、どうして宙に浮くのか分からない、という。写真にとったので、お賽銭をあげた。彼女は目を除いて顔を布で被っているが、ちょっとお礼のお辞儀を私にした。少額なので、恥ずかしい。ヨーロッパでは大道芸人が多い。

ミラノ中央駅から列車ユーロスターでヴェネチア・サンタルチア駅へ向かった。ミラノは今回の旅行の主目的ではないので、短い滞在であった。ここで見た物は全部中心部になるので、ここは歩いて見廻れるのではないかと、思う。

補遺

ローマのヴァチカン宮殿に、ミケランジェロの「ピエタ」がある。その写真集の1つに、アウレリオ・アメンドラ写真集『ミケランジェロ ピエタ』岩波書店、がある。

このマリア像は若い女性であり、34才の死せるキリストを抱いているので、年齢の点でおかしい、17才でキリストを生んだとしても51才だ。それが20才くらいのマリアである。だがミケラ

ンジェロは、年齢を考えないで作ったと言っているそうである。

20世紀末、玄関の正面におかれていたこのピエタの MARIA 像の鼻先の一部が、心ない人に壊された。そこで完全に修復されたが、今ではガラス室の部屋に入るようになった。

ヴェネチアについては、持田信夫写真集『ヴェネチア 沈みゆく栄光』徳間書店。がある。一般的なものとして、『イタリア絵画』日本経済新聞社、カブレッティ『イタリア巨匠美術館』西村書店、がある。